

学校だより

7月号

一中の桜並木

令和6年7月16日

「教育目標」

考える人 思いやりのある人

助け合う人 成しとげる人

連雀学園三鷹市立第一中学校

校長 宮城 洋之



「言葉」を手に入れること

校長 宮城 洋之



一中ホームページ

7月に入ってから猛暑が続きますが、梅雨明けはまだのようです。さて、日本語で「雨」を表現する言葉は一説によると400種類以上あると言われます。たとえば、「突然降りだす雨」には季節や状況、降り方の微妙な違いに応じて「にわか雨」「夕立」「ゲリラ豪雨」「天泣」といったいくつもの呼び方があります。「梅雨」についても梅雨入り前に雨が続くのは「走り梅雨」、梅雨入りしたのに雨が少ないと「空梅雨」、激しい雨になれば「暴れ梅雨」といったようにその言葉は実に豊かです。こうした言葉が生まれてきた背景には、農耕中心の歴史をもち、雨の恵みや災いととも暮らししてきた日本人の生活があると考えて良いでしょう。

これに対して、農耕と比べて日本での歴史が浅い畜産に関する言葉はシンプルで、たとえば「牛」なら子供は「子牛」、オスは「牡牛」、メスは「牝牛」というように「牛」の区別を端的に示すにすぎません。これが英語では牝牛は「cow」、牡牛は「bull」や「ox」、家畜として飼われていれば「cattle」、食肉になれば「beef」というように、それぞれを表す独自の言葉があります。

言葉というものは、このように人々の生活や文化と強く結びついていて、暮らしの中で捉え、認識した対象をくっきりと浮かび上がらせるものなのだと感じます。そうだとするならば、「言葉を手に入れる」ということは物事を豊かに捉える力を手に入れるということでもあるのではないのでしょうか。

たとえば、一中生の皆さんは自分の気持ちを表す言葉をどれだけ手に入れているのでしょうか。「うれしい」と「悲しい」の間の隙間をいくつの言葉で埋めることができますか。「楽しい」気持ちをその場面に応じて何通りに表現できますか。ちょっとした不快感を「うざい」で済ませてしまう人と、「うとましい」「苦々しい」「煙たい」「鼻持ちならない」「割り切れない」「鬱陶しい」といった多様な言葉で表現できる人とでは、見えている世界が変ってくるのではないのでしょうか。そもそも「考える」ことも「言葉」で行われるわけですから、「言葉」の豊かさは考えの豊かさにもつながるはずです。

☆

☆

☆

先月は「ふれあい月間」で「あいさつ運動」もありました。その言葉を使ったら相手がどんな気持ちになるのかを考えることも「言葉」を大切にすることです。相手に何かを伝えたいとき、どんな言葉を選択するか……それによって、相手を励ましたり、悲しませたり、自分自身もうれしくなったり、元気が出たりするものですし、何よりも言葉の選び方で、お互いの世界を共有することができます。ぜひ、一中生の皆さんには、豊かな言葉の使い手になってほしいと思います。そのためにもこの夏休み、いろいろな機会に「言葉」を意識してみてください。朝読書で読んでいる本から発展させて様々な本を手にとってみたり、誰かとコミュニケーションをするときや、夏の必修課題の作文に取り組むときなど、「言葉」に目を向け、「言葉」の使い方について考える機会はいくらでもあります。

豊かな言葉との出会いを通して豊かな人間性を身に付ける……そんな夏にしてください。